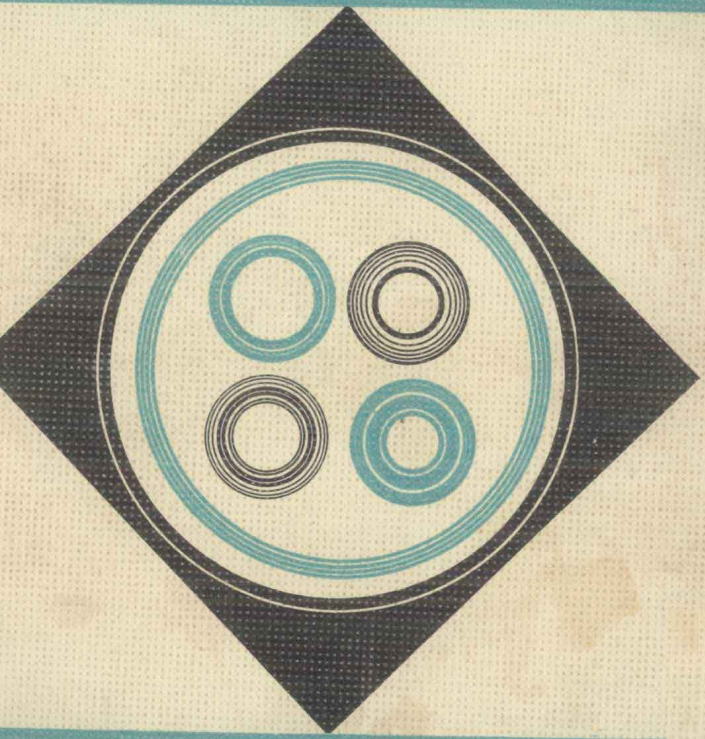
古典落語名作選

富田　宏編



金園社

古典落語名作選

富田　宏 編

金園社

古典落語名作選

昭和四十二年十二月二十日 印刷
昭和四十三年一月十日 発行

定価 二八〇円

編者 富田宏

発行者 松木春吉

印刷所 赤城印刷所

発行所 金園社
東京都台東区東上野二ノ九ノ六
振替 東京九三七八三番
電話(八三三)四〇二一番(代)

愛読者サービス券

金園社の出版物を御愛読頂きましてありがとうございます。平素の御愛顧の印として

愛読者サービス券3枚を封書で御送付ごとに

高級3色ボールペン1本を進呈いたします。

- 本券の有効期間

昭和44年12月末まで

古典落語名作選

43・1

切取線

- 金園社では実用百科選書・自動車双書・辞典・囲碁・将棋双書など400点余を刊行致しており、全点に愛読者サービス券を添付しております。
- 出版目録御入用の方も下記へご請求ください。
- 宛先

東京都台東区東上野2丁目9
金園社愛読者サービス係

はしがき

落語、おとしばなし――人間に言葉のあるかぎり、すたれることのない楽しみであろう。これを演ずることで、商売になるはなし家という職業が生じたのも、人間社会の発展からみて、おもしろいことである。はなし家という専門家による落語は、寄席、演芸場、あるいはラジオ、テレビ、ホールの落語鑑賞会で聞いたり見たりすることができるわけだが、もうひとつ、落語を読むという楽しみ方がある。

落語の速記録というものが戦前からあって、娯楽雑誌の読み物としてさかんに取り上げられた。その記録とコレクションの功労者に、今村信雄さんという人がいた。速記落語のおもしろさは、演者の語り口をそのままとらえているところにある。これを読者が自から声を出して読めば、寄席の高座を居ながらにして再現することにもなるのである。

むろん芸というものはかぎりなくむずかしいもので、声にして読んだからといって、速記の演者と同じになるわけのものではない。しかし、そこは人間の想像力という重宝な力がある。仕草、表情などはそれでおぎなっていただこう。ご存知の名人上手の芸を思い起こして、読者なりに脚色していただこうこの本は、そうした読み方をしていただきたいのである。

今村信雄さんの労作に編者が若干アレンジの手を加えた。あんまり、時代な表現は省略したり、言いかえたりしてみたが、速記された当時の、つまり明治・大正・昭和初期の時代相なども、実は速記もの

のおもしろさの要素だと思われる。だから、ある程度はそういうものも残してある。演者の口調も、現代の落語家のそれとは大分違うところもある。それも読み方しだいで、いかようにも変化がつけられるわけで、この本を持てば、ひとりで寄席を経営し、番組みを組み、名人会を開催し、お客となって楽しむことができる——そういうような気楽な使い方をしていただきたい。

落語とは、こうでなければいけない、ああしては間違いである——と、まるで学問かなにかのように研究する流行もあるが、演芸とは大衆の好みをもとにして、少しずつ洗練されていくのが自然のなりゆきである。この本は一種のテキストともいえるだろう。読者のユーモアで色付けされて、さらに名作、傑作として後世に残される落語になることを願っている。

富田　宏

さしえ・題字　林家木久蔵

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongl

目　次

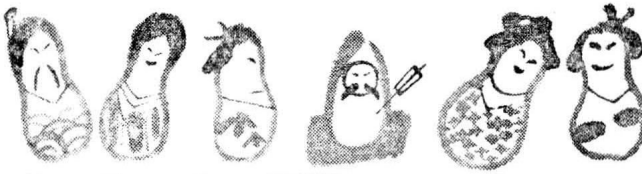
第一編　春の巻……七

猫の忠信（猫忠）……九

野ざらし……一〇

心眼……一二

お見立て……一四

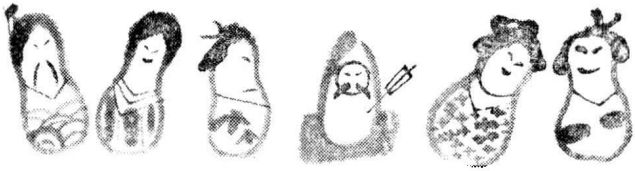


剃刀……五五
粗忽長屋……六六
てんしき……七四
一目上がり……八八

第二編　夏の巻

……九九
道灌……九九
酢豆腐……一〇八
唐茄子屋（かぼちゃ屋）……一二二

永代橋（武兵衛違い）……一三八
佃　祭……一三八
鰻のたいこ……一五一
第三編　秋の巻……一五九
目黒のさんま……一六一
まんじゅうこわい……一七四
庖　丁……一八二
こえ瓶……一九三



鮑のし……二〇二
子ほめ……二一三

第四編　冬の巻……二二三

たらちね……二二五
八百屋お七（お七の十）……二三四
鰍沢……二四二
芝浜……二四九
明烏……二六三

春の巻

落語には、それとハッキリわかるような直接的な描写はなくても、題材なり、登場人物の会話や行動なりに、季節を感じとることができる。名人上手は、はなしの中に、きっと、季節感を何らかのかたちで演出し、はなしを生命(いのち)あるものにしている。この本は、そういう春夏秋冬のニュアンスをもとに、分類してみた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongl

猫の忠信（猫忠）

毎度落語家がお女中のことを引き合いに出しますが、どうもご婦人が出ないとはなしになりません。町内へ稽古所ができましても師匠が女と男とでは人気が違います

○「オイ、横町へ稽古所ができたぜ」

△「女か男か」

○「男だ」

△「まだこちとらへ顔を出さねえぜ。病犬をけしかけてやろうか」

などとおっしゃいます。女が稽古所を始めますと、

○「横町へ稽古所ができたぜ」

△「男か女か」

○「女だ」

△「女か、じゃァ早速弟子入りをしようじゃァねえか」

といって、常磐津か清元か知らないで、稽古入りをするが、女という者は大した愛嬌の者で、お師匠さんの方でなかなかお世辞を振りまくのがむずかしい。稽古はつけたりで、師匠をおれが手に入れてしまおう、おれが師匠を食ってしまおうとまるで化猫みたように、ねらいをつけております。そのうちにお寒くなりますと、炬燵というものが出ます。これを俗に世話箱と申して、良くないものでございます。お師匠さんがあたっておりますとその向こう前に若い衆が入ってあたっているが上に布団が掛っていますから中でなにをしてもしれません。四方山話し、芝居がおもしろいとかどこへ行ってみようとかいう話をしておりますうちにまさか無法なこともできませんが、ちょっと、手先へさわる。小指を一本引っぱってみて、黙っているから、そのつぎの薬指を引っぱってみる。順に五本引っぱってしまっても黙っているからそれから、マア師匠の手を撫でてみたり、くすぐってみたりすると向こうで手をつねります。これやァ占たと忠うからグッと手を握る、向こうでも締つける。もう占たもんだ。師匠はおれのものだと、しっかり握っておりま

す。そのうちは台所でおっ母さんが、
母「ちょっと師匠来ておくれ」
師「アイヨ」
とお師匠さんは台所へ行ってしまう。師匠が台所へ行ったのに手を握っているから、はてな師匠が台所へ行ってもここに手がある。恐ろしく長い手だなと、若い衆どうしヒョイと顔を見合わせて、
○「何だ手前の手か」
△「手前か、おれの指を引っぱったなァ」
○「畜生、おれの手をつねったな」
△「恐ろしく師匠はあぶら手だと思ったら手前か」
○「おれも師匠の指にしちゃァ爪がはえ過ぎていると思った。少し爪を取れ」
△「この握った手はどうする」
○「しかたがねえから腕押をしよう」
炬燵の中で腕押を始めるなんて、大いに間の悪いことがございます。師匠は、ひとりだけに世辞を言いますと、ほかの若い衆の気を悪くしますから、おおぜいにまんべんなく世辞を振りまく。便所から出て、
師「ちょっと辰さん、すみませんが冷水を持って来て頂戴な、手洗鉢に水がないから」
この辰さんという人が親に言いつけられても、動こうとしない無精者だが、師匠の声がかかると、
辰「オイ来たッ」
返事とともに立ち上がり、水を汲んでくる。これだけおおぜいいる中で、水を持ってきてくれというからは、師匠はおれに思召しがあるんだと大喜び、するとお師匠さん手を洗ってしまって、
師「ちょっと源さん、この手拭いが濡れてるんですが、あなたの手拭いを貸してちょうだいな」
この源さんもこれだけいる中で、おれに手拭いを貸せというからには、師匠は思召しがあるなと思う。師匠がずっと見回して、
師「あの平さん、お茶を一杯頂戴な」
平「ヘエ、おれは茶をくれというのは思召しがあるな」
と喜ぶ、あとにまだ二三人いる、そこへ来て、

師「どうかこのあいだへ坐らしてくださいな」
　と右の若い衆の膝をグイと押して、左の若い衆の横腹をウンと突く。膝を押された人も横腹を突かれた人も、
○「もう少し酷く押せばいいな」
△「もう少し酷く突けばいいな」
　酷く突かれれば呼吸が止まるかもしれない。生命がけでお師匠さんの所へ行くようなことになりますが、そのうちにひとりこの人というのができたとなると、サア、面倒だ、ほかのお弟子が寄るとさわると、
次「オイ六さん、文字静のところへ行くかい」
六「このごろ行かねえよ。……時に次郎さん、なんだか吉野屋の常公と師匠、怪しいっていう、評判じゃァねえか」
次「評判どころか、大出来なんだ。確かにできてることを、ちゃんとおれは知ってる……。行くな行くな、おれももうとうから行かねえんだ。師匠だってなにも吉野屋の常公なんかといい仲にならねえたっていいじゃァねえか、ほかに男がないじゃァなし」
六「けれどもマア、常公はちょっと様子がいいからなァ」
次「忌々しいなァ本当に、ふざけやがって、師匠があなったのは、だれのおかげだと思ってるんだ。親父が死んだ時に、おふくろがなんといった。どうかこの先は町内の若い衆さんたちになにぶんお願い申します。ひとえにお助けくださいましと、頼みやがったくせにしやァがっておもしろくもねえ畜生」
六「なんだかお前のように言うと、まるでおれが小言をいわれているようだ」
次「むこうへいうのを、手前で間に合わしておくんだ」
六「つまらねえことを間に合わしてるもんだ。ふざけちゃァいけねえ」
次「なにか意趣返しをしてえもんだな」
六「そうよ。どうだろう。あの常公の女房はたいへんな嫉妬やきだから、常公の留守に行って、あの女房をたきつけよう。常公が帰ってくると夫婦喧嘩がはじまるそれを高見で見物して笑ってるてえのはどうだ」

次「そいつァおもしれえな。早速やっつけよう。おれは人の家に騒動のできるのは大好きだ。めでてえことなんかあると癪にさわるが、ゴタゴタがおッ始まるとうれしくって仕様がねえ。なにしろひとつ行って焚きつけよう」

六「けれども、これから行ってもし家に常公がいた日にやァつまらねえ。師匠の家に常公がいるかいねえか、見てから家へ行く方がいい」

次「そうだ、じやァ師匠の家へまわって行こう、……どこからか覗くところはねえか」

六「黒塀の真中に穴があいてる。ここから覗いてみねえ」

次「ウム、いるいる、畜生、師匠とふたりで酒を飲んでやがる」

六「どうだい、おれにも見せろ、ウームなるほど、オヤッ師匠が常公の膝に寄っかかって、常公のほっぺたを小揚枝で突ついてやがる。証拠を見届けた上は猶予はならねえ。家へ行って女房に焚きつけてやろう」

次「よし、火をつけており込んでやれ」

不用心の人たちがあったもんで。

六「内儀さん今日わ」

女「オヤいらっしゃいまし」

次「今日は、どうも好いお天気ですな……、相変わらずお店番をしながら針をもっておいでですね。ネエ六さん、内儀さんが店番をしながら裁縫をしていなさるなァ感心だなァ。お内儀さんは当たり前だというが、この当たり前がなかなかできねえことだよ。おれの女房なんざァ店番をしながら居眠りをしやがる、ほんとうによく居眠りをするって、あんな居眠りの好きなやつもねえもんだ。あんまり居眠りをするから、このあいだこういうことを書いてやった。朝寝して、夜寝るまでに昼寝して、起きている間も居眠りをする、それでも一向感じがねえんだから困っちまう。それから思うと、うちの内儀さんは実にえらいもんだ。だがねえ六さん、こういう結構な内儀さんを持ちながら、どうもあんな師匠なんかに浮かれているなァ量見違いだな」

六「オイ、およしよおよしよ。常さんが内儀さんを離縁して師匠を女房にしようなんてえ腹のあることを、内儀さんに聞かせねえ方がいいよ……。オイ黙ってねえよ」

次「アァ言うめえ……。それをいうとよくねえからいうめえよ」

女「ちょっと、あなた方、私どもになにかできたんでございますか」

次「ソラおいでなさった」

六「お言いでないよ……。言わない方がいいよ」

次「けれどもね六さん……、少しやァ聞かしておかないとかえってためにならないよ」

女「なんですか六さん、聞かしておいてくださいな。ねえ次郎さん、なにができたのです。決してあなた方にご迷惑はかけませんから、私に含ましておいてくださいな」

次「六さんえらいねえ。あなた方にご迷惑はかけませんから、含ましておいてくださいというなァ恐れ入ったね。じゃア内儀さんに内々お話をしますがね。実はどうもおしゃべりをするなァあんまりよくないことじゃァあるけれども、どうかただ腹へ納めておいてくださいよ。こういう訳なんです。みんなでもって遊び半分に横町の常磐津の師匠のところへ弟子入りをしたところが、あの師匠とお前さんとこの常さんと、いい仲になったんです。どんな仲になったって　なにも私たちのかまったこッちやァねえが、このあいだふたりで話しているところを、ヒョイと立ち聞きをするとね。なんでもお前さんを出してしまって、師匠を女房にしようという相談なんだ。もっとも途中から聞いたんだから　はっきりしたことはわかりませんが、ヨウ常さん内儀さんをいつ出すんだよ。私はうちへ早く行きたいのだよーと、あの女がいってるところを聞いたんですが、なんと憎い女ですねえ。しかし常さんは、師匠そう急いだって仕様がねえ、そのうちにいいおりをみて追い出すとこういってましたよ。マアお気をお付けなさい。いいおりがくるとお前さん追い出されるか、い

いおりがなけりやァ竹の皮で間にあわせるかもしれませんけれども」
女「マアどうもあきれましたねえ」
次「ほんとうにあきれましたよ」
女「私はちっとも知りませんでした。よく教えておくれでした」
次「けれどもマア内儀さん心配しなさんな。いよいよそんな話が持ちあがりやァ、私と六さんとで常さんにかけ合ってあげますから、マア落ち着いておいでなさいイザとなりやァ私と六さんが内儀さんのために肌を脱ぎますよ」
女「なにぶんどうかお願い申します……。ほんとうに私はくやしうございます」
次「そうでございましょうとも、内儀さんの身になればくやしいのは当たりめえだ。私たちだってくやしいんだから……、ねえ六さん」
六「アア、くやしいともね、今も師匠が常さんの膝へ寄っかかって、小揚枝で常さんの頬っぺたを突っついて、真昼間だってえのに、ふざけているところを見せつけられたんだからね。くやしいな」
女「マアちょっと、それはいつです」
六「たった今見てきたばかり」
女「今ごらんなすって……」
六「ヘエ」
女「オヤそうでございますか。それをうかがって安心しました」
六「ヘエー、安心したえ。こりやァえらいね、それを聞いて安心したといって落ち着いてすわっておいでなさる胆力には驚ろいたね。たいがいなら駈け出して行って、胸倉でもつかまえるところだ」
女「ですけれどすね、たった今見て来たとおっしゃるから安心しております」
六「そりゃァまたどういう訳で」
女「家にいるんですもの」
次「エッ、家にいる？。冗談いっちゃいけません」
女「あなた方のお話がきれませんから、起こしませんが

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongl